

第706号

令和6年4月23日

題字は二代真柱様

大阪市北区池田町13-17

天理教はるのひ分教会

TEL・FAX

06-6358-2630

陽気ぐらしへ学びと試み

はるのひ館



▶はるのひホームペー
「はるのひ」のQRコード
142246回ロー・特
09 聖囀 聖囀 聖囀



『路傍講演⑨』

ここ、大阪はなんば高島屋の前をご通行中の皆さん、私たちは天理教の布教隊です。

令和八年一月に【教祖（おやさま）百四十年祭】を迎えるまでの三年千日の期間中

大阪教区三十三支部が当地において、毎日順繰りに午前十時から「神名流し」と「路傍講演」を展開しています。

私は地域では保護司という役割を担っていますので、毎年小学校の入学式などには参列させて頂きませんが

今年はお天候も上々、桜も見ごろとなって、祝福気分を盛り上げてくれました。

新一年生を横から見ていると、みんなほとんど足が床に届かず無意識にぶらぶらさせています。

式の終わりころには、二年生が入場してきて、舞台の前で歓迎の群読や演奏をします。

背格好はそんなに違わないのですが、表情、態度、パフォーマンスはまったく異なり

たった一年間でこんなにも差ができるのか、と改めて子供時代の時間密度や学校生活の価値に気づかされます。

おやさま（教祖）の教えの中で、私がとくに感銘するのは、生涯「心の成人」をめざすという人間観です。

私のように後期高齢者ともなれば、体力、気力を始め弱まるばかりで我ながら情けなくなりますが

だからこそすべては「心しだい」という教えがいつそう実感されます。実際、九十才、百才でも

元気な方々もおられます。成人という言葉は現在では一月の成人式以外にはあまり聞かれませんが

人間の特徴いや本質を表す重要な言葉ではないでしょうか？人類の目標である「陽気暮らし世界」も

戦争や革命によって実現されるのではなく「心の成人」の結果であり結実であるところに値打ちがあるのです。

『逸話篇から学ぶ十四 飯降伊蔵先生⑨』

芝 光男

教祖がお姿をお隠しになってから、本席飯降伊蔵先生は神様のような存在としてあがめられました。しかし、高ぶることもなく、だれに対してもつねに低いお心でお通りになりました。

私たちは、人の上に立つと、知らず知らずのうちに言葉つかいや物腰、態度が尊大になりがちなものです。

おさしづに、

「慎みが理や、慎みが道や、慎みが世界第一の理、慎みが往還や程に」

とお諭しいただくのです。

本席様のお宅に伺った人が、深々と頭を下げてご挨拶をし、もうそろそろいいかなと頭を上げると、本席様はまだ頭を下げられておられた、という話が残

っています。

さらに本席様の晩年のお話。

心から本席様に私淑しておられた郡山の初代平野楯蔵先生が本席様のご苦勞をお労いしようと考え、郡山詰所に立派な庭園を造りその落成祝いに本席様をご招待し、心いっぱいのおもてなしをされたことがありました。

やがて食事となり、そこに並べられたのは、郡山の信者さん方が用意された真実のこもったご馳走でした。

ところが、いつまでたっても、本席様はじつとさされていてそれらに箸をつけようとはなさらなかった。

たまりかね、平野先生が、

「何か、お気に召されませんでしたか」

とお尋ねされた。すると、

「いやいや、みな私の好物ばかり…ただ、あの時に、教祖にこんなご馳走を召し上がっていただければ…と思えばもったいなくて、心がいっぱい詰まってしまうのじゃ」

とおつしやり、涙をボロボロと流され、そこにいる人たちも共に涙を流されたというのです。

教祖のご苦勞を「存じの本席様ならではの逸話です。

三月月次祭講話（要旨）

会長 芝 太郎

『感動を待つのではなくみずから作り出す』

きょうもようこそ月次祭にお帰り下さいました。ともに陽気に勇んですわりつとめておどりをつとめて頂きありがとうございます。

教祖百四十年祭をめざす二年目の活動目標に、現在のごとく、三通の提出を頂いています。ありがとうございます。どうか、これからもしどしどしご協力をお願いします。

「感動しましょうー」と呼び掛けているわけですが、なぜかと言うと、感動すると、心が新しく生まれ変わる、喜びや勇みが湧いてきておのずと前向きになるからです。しかし、感動は自然にやってくるもので、自分でわざと感動を起こさせるなんて、と思うかもしれません。そこで、父の書いた『一日一回おさづけ』の中に次のような話があるのを思い出してほしいのです。

父と母が信仰を志して、何度もたすけて頂き、また直接大きな影響を受けたのは、柳井徳次郎と言う先生なんです。喘息が直ったのも、私の夜泣きを止めて下さったのも柳井徳次郎先生のたった一言でした。その柳井先生がみんなに講話をされる、その時の話はいつも「目が覚めたら障子が見えますねん。朝の光に当たって真っ白な障子が見えますねん。また雀の声がピーチクピーチクと聞こえますねん」というような話から始まった、と父は言うてましたね。

この徳次郎と言う先生は若い時に、悪い病気にかかって目が見えなくなつた。関東からわざわざ助けをもとめておぢばまでやって来られた。その時に相手を

なされたのが、『教祖逸話篇』にも出てくる榊井伊三郎先生。伊三郎先生から「あんたは親不孝やったんやなあ」といきなり言われて、伊三郎先生の心の力がそうさせたのか、徳次郎先生は本当に懺悔した、滂沱（ぼうだ）と涙があふれた、そして気がついたら目が見えていた、という。

目が見えなくなつて、ひよつとしたら、もうそのまま一生見えなかつたかも分からない。それが榊井伊三郎先生の一言で救けて頂いた。その忘れるに忘れない体験があるものですから、目が見えるというところがどんなにありがたいことか、決して当たり前ではない、感謝しても感謝しきれない、喜んで喜んで喜びきれない、その強い思いをいつも我とわが身に言い聞かせる。それが「目が覚めたら障子が見えますねん…」という先ほどの話になるのです。よう。ですから、私は柳井先生は一度の体験を、毎日毎日、いつもいつも、思い出しみずから言い聞かせておられたと思うわけです。

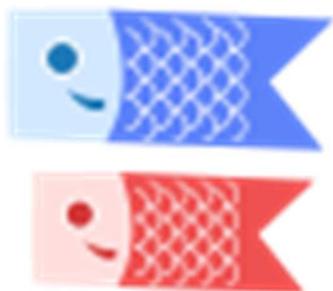
そこで私は、感動をただ待っているのではなく、みずから作り出すことが大事だと言いたいです。い

や実際に誰でもいつどうなるか分からないのですから。怪我して事故に遭つて目が見えませんがよと言われるかもしれないし、あるいは病気でね、目が見えなくなるかも分からない。いつどうなるかは誰でも保証は無い。だから、朝起きて、目が見えなかつてもおかしくない。そのことを考えると、すごいなあと思う、目が見えるということが。それだけじゃないですよ。足が動いて歩けるということ。思うことが、このように思い通りに言葉となつて話せるということ。ご飯を食べたら、ご飯の味、魚を食べたら魚の味がする。耳が聞こえる、手が見える…例を挙げ出したらきりが無い。そんなにまで私は無数のことができ、無数のことに恵まれている。このことに感動しないなんてむしろあり得ないと思いませんか？

そしてこの感動がロケットの噴射のように生きる力となつて私を前に押し出し、打ち上げる。生きるということは本来そういうことではないでしょうか？おやさまがみずから範を示して、どんな中でも明るくいそいそと行動され、そしてまた人々に「よろこびや」「よろこびなされや」とおっしゃつたのはそういう意味

ではないでしょうか？

どうか、感動を待っているのではなく、他の誰でもないみずからの身に現に起きている生命の奇蹟に気づいて、目が見える、足が歩ける、話ができるといふふうに、無数のことに感動を作り出して、生きる力を噴射させようではありませんか？ありがとうございますございました。



☆お知らせ☆

★4月26日(金) 9時 本部・月次祭

★4月29日(月・祝) 全教一斉ひのきしんデー

8:30 はるのひ分教会出発→真田山墓地

お住まいの地域、各支部で参加して下さい

★4月29日(月・祝) 18時 詰所祭

★5月5日(日) 10時 女子例会

★5月12日(日) 9時半 おぢばがえりひのきしんと男子例会(詰所)

★5月12日(日) 別席日(※一週間前の予約によって車出勤)

※別席場受付は、①午前8時～9時半 ②正午～13時半

★5月18日(土) 10時 茶道 13時 三曲練習

★5月22日(水) 前日準備ひのきしん

★5月23日(木) 11時 月次祭

★5月26日(日) 9時 本部・月次祭

☆人生とは、生涯かけての心の成人・自分づくり

☆信仰とは人生観・世界観をみがきつづけること

そのために、用意されているのが

・おぢばがえり ・基礎講座 ・別席 ・三日講習会 ・修養科 ・講習

○修養科をおすすめしましょう!(毎月、25日までに申し込み)

・若い方=これからの人生の基礎固めとして

・年配の方=人生の美しい集大成のために